

大石泰夫 提出 学位申請論文

『芸能伝承の民俗学的研究』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、在地に伝承される所謂「民俗芸能」について、芸能が行われている現場から、それがいかに「伝承」されているかを論じ、「芸能伝承」の実態と特質を説明することを目的とする。これは、あくまで芸能が行われ、伝承される現場の「動態」から問題を立ち上げ、その問題について、芸能を伝える地域の民俗と関連づけながら検討するということであり、この意味から論文標題を「芸能伝承の民俗学的研究」とするとう。

ここに掲げる「芸能伝承」という用語は、折口信夫によるもので、申請者は

この用語に折口の民俗芸能研究の視点や課題が表れているとする。それは「民俗研究の意義」（昭和十年、全集十九卷所収）で論じられ、現実に目の前に展開する芸能を対象とする民俗研究の課題についての折口の考えは、「此学問は、それがいつ起つたかを知る為よりも、どうして起つたか、又、どうして形を変へたか、更に進んでは、どういふ点で現在及び将来に交渉するかを知る上に役立つものだと思へばいい」という一文に集約されており、芸能伝承の研究課題には、その芸能が「どうして起つたか」、「どうして形を変へたか」、「どういふ点で現在及び将来に交渉するか」の三つがあると説く。

この言説から折口は、芸能研究は現実の芸能の伝承に即したところから発し、まさに伝承を「動態」として捉えることを考えていたのがわかり、折口の「芸能史」または「芸能伝承論」は、いつの時代にどうなったというのではなく、現実に展開している芸能に変化の過程を洞察して、それをいわば進化の行程として示すことを目的としたと解釈できるとする。

本論文は、基本的にはこのような折口信夫の民俗研究の視点や課題に導かれたもので、「緒論―芸能伝承論―」で、まずは如上のような研究視点と課題を明確にし、「第一編 生成論」、「第二編 機能論」、「第三編 伝承現場論」、「第四編 現在・未来論」、そして本論文の結論である「総括」から成る。各編の内容は標題だけではわからないが、「生成」、「機能」、「伝承現場」、「現在・未来」というのは申請者の芸能伝承研究の視点を示すもので、これは先の折口信夫の視点と課題を置き換えたものであるという。つまり、折口がいう「どうして起つたか」というのが、芸能の生成論であり、「どうして形を変へたか」が伝承地における芸能の機能論、「どういふ点で現在及び将来に交渉するか」が、芸能の伝承現場論であり、芸能の現在・未来論でもあるとする。

申請者は、この四つの視点と課題を切り口にしながら、各地に伝えられている個別の民俗芸能を題材とし、ここから従来とは異なる芸能の伝承論と民俗芸能研究の方法論の樹立を目指す。

各編の内容は、第一編は「第一章 芸能の生成をめぐって」、第二章 ウタの生成―奄美八月踊りの歌から―」の二章からなる。第一章では、芸能がもつ「神事性」と「娯楽性」を論じている。民俗芸能研究においては、その初期から芸能と宗教的な「儀礼」とのかかわりが論じられてきた。何故、あるいはどのようにして「儀礼」が芸能に転ずるのかという問いであり、この問題について、ここでは芸能がもつ神事性と娯楽性は、その芸能を取りまく人々の意識のありようから生み出されていることを論ずる。つまり、芸能は、その実修者が意識する神事性と娯楽性とによって生成されると捉えるのである。ただし、ここでいう生成は、時系列として最初に生み出された芸能という、芸能の歴史的始源をいうのではなく、ある行為が、何らかの事由によって芸能として行われたり、解釈されたりするという意味である。さまざまな行為は、社会の中で常に芸能化する要素をもっているということ、この視点は折口がいう「それがいつ起つたかを知る為よりも、どうして起つたか」という問いと同様の発想で

あるとする。

神事性と娯楽性からの芸能の生成については、第一には身体の動きに対する「第三者の目」が、「儀礼」が芸能へ転じる必須の存在であるという。そして、第二には実修者の身体技法が「儀礼」になるか、芸能になるかは、それが演じられる「場」がもつ意味、つまり「場」の背景によって見立てられる演者の「立場」が重要な意味をもつと指摘する。これは申請者が参画した研究会（民俗芸能研究会／第一民俗芸能学会）の議論を踏まえたもので、このことを具体的に論ずるのが第二章である。第二章は奄美大島の八月踊りとその歌を考察したもので、これらによって「儀礼」と「芸能」の間を振幅しながら生成される民俗芸能のありようを検証しようとしている。

第二編は、芸能がもつ伝承地における「機能」について、具体的な民俗芸能を対象としながら論じている。各地に伝わる民俗芸能の多くは、いわば流伝や伝播によってそれぞれの地域に定着したものである。つまり、申請者の視点は、

あるところで生成された芸能が、その地域社会とは異なる民俗をもつ地域に流伝あるいは伝播し、どのように定着して伝承されているかにあり、その定着、伝承の過程では、その芸能が本来的にもっている意味を負いつつ、地域社会の民俗論理によって捉え直されたり、再解釈されたりしながら伝承されているとする。こうした問題把握が、芸能の変容の研究であり、折口がいう「どうして形を変へたか」という課題になるといふ。そして、この変容にこそ、芸能を受容した地域の論理から言うなら、流伝あるいは伝播してきた民俗芸能の、その地域における機能が表れていると主張する。

こうした論理を導き出しているのが第二編の各章で、「第一章 民俗芸能の伝播」では、まず岩手県の山伏神楽の伝播を取り上げる。ここでは、山伏神楽は、他所には流出―伝播しにくい性質をもつが、演技者が伝承集団から逸脱したり、移動を余儀なくされたりした場合には他所への伝播があったことを明らかにし、こうした伝播の担い手を「はぐれ者」と位置づけている。次にはこう

した伝播のあり方を踏まえて、静岡県伊豆半島の三番叟について伝承者の移動という視点から伝播を明らかにする。

第二章以降では、個別の民俗芸能について、その芸能がもつ本来の意味を押しさえながら、実地の民俗調査からそれぞれの地域における民俗芸能の機能を検証している。「第二章 依り来るカミの化生―伊東市富戸の鹿島踊りの機能―」では、伊東市富戸の「鹿島踊り」を取り上げ、この地の鹿島踊りの機能を、踊りが「奉納される祭りの伝承」、「奉納される場所の伝承」、「生業暦からみた意味」などから分析する。「第三章 蓮華会とサトの夏―蛙跳び行事をめぐる民俗―」では、奈良県の金峯山寺蓮華会に伝わる「蛙跳び行事」について、その歴史的変遷を修験者の民衆教化と関連づけながら辿るとともに、奈良県の祈雨信仰との結びつきからその意味を明らかにする。

「第四章 若者の民俗としての三匹獅子舞」では、一九六〇年代後半から急激に人口が増加した千葉県松戸市の三ヶ所に伝承される「三匹獅子舞」を取り

上げる。急激に都市化した地域の若者たちにとっては、旧習の象徴ともいえる民俗芸能は興味の対象外となるのが当然である中で、どのような仕掛けが彼らを三匹獅子舞に引き付けていくのかを明らかにする。「第五章 岩手県の神楽とその機能」では、地域住民にとっては信仰そのものともいえる「山伏神楽」を取り上げ、芸能が地域住民の信仰そのものになっていくための演出を明らかにする。「第六章 『盛岡さんさ踊り』考―イベント祭りと民俗芸能―」では、盛岡市のイベント祭りである「盛岡さんさ踊り」を取り上げ、ここに展開する民俗芸能のあり方を分析することで、民俗芸能の現在の課題を明確にする。

第三編は「伝承現場論」を課題とする編で、静岡県西伊豆町宇久須に伝承される「人形三番叟」について、二十年にわたる調査をもとに、さまざまな角度から論じている。ここでとられている記述の視点は、二十年にわたる調査の中で、芸能の伝承現場を調査者が伝承者とともに経験していることに基づいている。申請者が当地へ通った二十年間には、まさに人形三番叟の演技者やその指

導者、さらに公演をめぐる社会環境などに変化があり、こうしたことを申請者と伝承者がともに体験しており、この共通体験から芸能を叙述するということがある。

「第一章 伝承の現場とともに―二十年民俗誌の試み―」では、こうした記述の意図を述べ、「第二章 伊豆半島の三番叟―研究史の整理と東子浦人形三番叟の復活」、「第三章 宇久須の概況と三番叟の現況」では、伊豆半島の三番叟全体についての概要、宇久須の三番叟の現況を記述する。「第四章 宇久須の若者組―かつての人形三番叟の伝承組織―」では、宇久須の人形三番叟の伝承母体であった「若者組」を論じて、その実態を明らかにする。「第五章 民俗芸能と老人―演者を退いた者、あるいは熟練の演者と民俗芸能―」では、この人形三番叟が若者の芸能として認識されていることから、それ以外の、芸能に熟達した老人が与える人形三番叟への影響を明らかにする。「第六章 演技の熟練への構造―宇久須の人形三番叟の事例を手がかりとして―」では、民俗

芸能においては「芸の達成」がどのように測定されるのかを問題とし、それは芸能を伝承している共同体の中に立ち上がる芸能に対する意識と、演技者である伝承者の意識との中で可變的に設定されることを明らかにする。

「第七章 『天下御免』の三番叟―民俗誌の新たな視座へ―」と「第八章 『天下御免』の三番叟、その後―民俗誌のさらに新たな視座へ―」では、従来の民俗誌が志向してきた客觀的記述に対する疑義を主張し、民俗誌の中に調査者の姿、調査者が感じた主觀をも含めた話者の姿を書き込むことによって、民俗誌記述者が提供する情報の位置づけが行われることを論ずる。

「第四編 現在・未来論」では、民俗芸能における「伝承の現在」をいかに捉えていくか、また「伝承の現在」に存在する現実的な諸問題を提示する。「第一章 『民俗芸能の継承・断絶・再生』がめざすもの」では、過去において中断したり、まったく新しい芸能に生まれ変わったりしたような民俗芸能を具体的に取り上げ、民俗芸能の伝承のあり方などを論ずる。「第二章 民俗芸能と

民俗芸能研究」では、一九九〇年代前半の民俗芸能研究の動向を踏まえ、研究の現在の課題を論ずる。そして「第三章 老人と過疎―民俗芸能の継承から―」では、後継者不足に悩む岩手県の山伏神楽の現状を踏まえて、伝承の未来に向けての提言を行う。

最後の「総括」では、各章を要約しながら現時点での結論と今後の課題を提示する。ここでは、今日、民俗芸能の多くが消滅の危機に瀕し、その意味していたものが大きく変わる状況が日々起きている。だからこそ今生きている民俗芸能を、ある意味で冷めた眼で、また研究者自身がこのことを等身大の問題として捕捉しなければならぬと主張する。民俗芸能が置かれているこうした現状は、すでに折口がいうように、実際に存在する芸能にはさまざまな要素が混在し、それは歴史としての古代であっても、現代でも同様であるはずで、常に発生と消滅が繰り返され動いている。歴史を遡ってみれば、多くの民俗芸能はそうした過去を繰り返しながら現在があり、民俗芸能を歴史的な価値観や文化

財的な価値観で評価するのではなく、本論文で論じた民俗芸能を「動態」として捉えるという視座を持つことによって、新たな伝承の可能性とともに、新たな研究の地平が拓けると主張する。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本各地に伝えられている所謂「民俗芸能」について、折口信夫が提示した「芸能伝承」という視点と課題を独自に捉え直し、地域において芸能がいかに生成され、また、どのように変容あるいは再解釈されて受け継がれているのかを明らかにすることを目的とする。それは、折口信夫がいう、その芸能が「どうして起つたか」を芸能の生成論、「どうして形を変へたか」を伝承地における芸能の機能論、「どういふ点で現在及び将来に交渉するか」を芸能の現場論として意味づけ、これらを基軸に据えて、地域社会に受容された芸

能が伝習され、演ずることが繰り返されていく伝承の動態を、広範囲にわたる自らの実地調査をもとに描いている。

現在言うところの「民俗芸能」という術語は、戦後の昭和二十年代半ばから使われるようになったもので、これ以前には「民俗芸術」とか「郷土舞踊」、「郷土芸能」などいくつもの言い方があり、その内容は必ずしも一致したものではなかった。そのためか「民俗芸能」自体もその概念は安定せず、現在も研究者による認識の違いが存在する。しかし、ここでいう「民俗」には多分に神事的あるいは儀礼的という意味が与えられ、「民俗芸能」研究は、その宗教的積義や身体表現の解釈を中心に、表現技法の比較などによる系譜論、あるいは芸能史的な位置づけを主流としてきた。申請者がこの論文で主題とする在地における芸能の伝習や継承のあり方を問うという伝承論は、まったく行われてこなかった訳ではないが、こうした研究は近年の動向で、むしろこれは申請者らが牽引してきたといっても過言ではない。こうした意味において、二十年余りに亘

って研究を続けた在地芸能の伝承論を一つにまとめた本論文のもつ意義は大きいといえる。

論文構成は、まず「緒論―芸能伝承論―」で論文の課題や方法、研究視点を論じ、続いて本論として二章からなる「第一編 生成論」、六章からなる「第二編 機能論」、八章からなる「第三編 伝承現場論」、三章からなる「第四編 現在・未来論」があり、最後に「総括」として論文がまとめられている。

全体としては二十一の章からなり、その大半が前述のように実地研究に基づくが、第一編の芸能の生成論では、芸能は、ある型をもった身体表現に対する人々の神事性と娯楽性への意識のありようから生成され、その意識は身体動きに対する第三者である観客の目と、それが演じられる「場」がもつ意味によって見立てられる演者の立場によって形成されると指摘する。つまり、芸能の生成を、表現の場とこれを取りまく人々の眼差しの存在から位置づけているのであり、研究対象としての民俗芸能を、その生成原理から規定し、歴史的制約

から解放した点は高く評価できる。

第二編の機能論については、ある地域へ芸能が流伝あるいは伝播し、これが受容されるにあたっては、その地域社会の民俗論理によって芸能が変容して根付いており、ここにその地域における芸能の機能が表れていると主張する。これは今までにない芸能の伝播・受容論として注目されるが、受容した社会における芸能の位置づけを「機能」と規定することについては、やや違和感があり、今後の検討材料となる。ただし、この編では岩手県の山伏神楽と静岡県の三番叟から、芸能伝播における「はぐれ者」の存在と伝承者の移動を明らかにした点は大きな成果といえる。

第三編は、申請者が二十年にわたって調査を続けている静岡県賀茂郡西伊豆町宇久須の人形三番叟をめぐる論述で、ここではとくに従来にはない視点として「芸の達成」、つまり演技の熟練がいかに測定されるかという問題が扱われている。長年の実地研究から、熟練度の測定は固定的ではなく、可変的である

ことを明らかにしており、今後の民俗芸能研究に新たな課題を提示している。

さらに本論文では、新しい芸能である「盛岡さんさ踊り」を取り上げ、多くの若者たちを惹きつける芸能の力と、村落社会とは異なる新たな芸能の伝承組織の存在を明らかにしている。また、第四編では、過疎化が進む地域の芸能として早池峰流神楽を取り上げ、実態を捉えながら今後の継承のあり方を論ずるなど、民俗芸能が抱える現実にも注視している。

以上のように本論文は芸能伝承論としての仮説をいくつも提示し、今後の民俗芸能研究に多くの問題を投げかけている。ただし、ここで展開する芸能伝承論は、すべてが演者側からのもので、芸能意識を生成する第三者や芸能の場を形成する演者以外の人々の具体的なあり方、また、演技を支えるさまざまな裏方についての実地研究は残されたままとなっている。さらに、流伝あるいは伝播してきた芸能を受容するに当たっての、地域社会における経済的裏付けなど、いくつかの点で論証に不十分な点がある。しかしながら、本論文は、芸能の伝

承現場での実地研究を積み上げながら、論文の主題である芸能伝承論を確実に前進させ、民俗芸能研究に新たな里程を築いている。また、申請者はこうした民俗芸能研究を、『万葉集』などの文学研究とともに行い、今後、文学の民俗学的研究に新たな領域を拓いていくことが期待できる。よって本論文の提出者である大石泰夫は、博士（文学）の学位が授与される資格があると認められる。

平成二十二年一月二十日

主査 國學院大學教授 小川 直之 ⑩

副査 國學院大學教授 倉石 忠彦 ⑩

副査 日本女子大学教授 福原 敏男 ⑩